様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １８ 日現在

機関番号：２２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１７４４４

研究課題名（和文）心不全終末期患者へのエンドオブライフケア：ケア移行の判断基準およびケア内容の究明

研究課題名（英文）End-of-life care for the patients with terminal-stage heart failure: The approach taken by nurses in deciding on care transition and the contents of care provided

研究代表者
坂本　明子（SAKAMOTO, Akiko）

千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教

研究者番号：５０６３４５１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、終末期移行の判断が困難である心不全患者が最期まで自分らしく過ごすことについて話しあいを持て、望んだ生き方を全うすることを可能にするため、看護師が終末期ケアへ移行するきっかけとなった患者の変化と変化に対する看護師の判断内容・患者に対して行った看護実践を明らかにすることを目的とした。終末期となる時期予測は、看護師が捉える患者の言動の微細な変化、知識と経験が統合してこそ感じ得る回復の軌跡の遅延、苦痛緩和とQOLのバランスの観点から推測できる可能性が明らかになった。また看護師が行った心不全特有な経過をふまえたエンドオブライフケア実践が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果である、①終末期ケアへ移行するきっかけとなった患者の変化と変化に対する看護師の判断内容、②心不全特有な経過をふまえた意思決定支援、低心機能にあわせた患者らしい過ごし方への試行錯誤、苦痛緩和に対する模索、家族支援などのエンドオブライフケア内容は、困難さが色濃く生じている心不全終末期看護における援助指針の一助となり、看護の充実が期待される。

研究成果の概要（英文）：Determination of whether a patient with heart failure has transitioned to the terminal stage is difficult. The present study aimed to elucidate the approach taken by nurses in determining this transition, specifically the kinds of changes in patients that nurses detect to enable these patients to have discussion and make decisions about their desires to live according to their wishes until the end of their lives and to realize their desired way of life, as well as the types of end-of-life care to be provided by these nurses. Our findings showed that nurses could predict the timing of terminal-stage disease by identifying minute changes in patient speech and behavior and by detecting signs of delayed recovery using their cumulative knowledge and experience, and then consider how to balance the need for pain relief and quality of life. The findings also showed how nurses practiced end-of-life care in a manner that reflected the specific course of heart failure.

研究分野：臨床看護学

キーワード：心不全看護　終末期ケアへの移行　ケア移行の判断内容　エンドオブライフケア　看護実践内容

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## １．研究開始当初の背景

慢性心不全は、加齢による心機能の低下や生活習慣病を合併した心疾患の終末像であり、高齢化や主な基礎疾患である虚血性心疾患の生存率上昇に伴い、有病率も上昇傾向である。その経過は、急性増悪と緩解を繰り返しながら徐々に進行し、終末期に至る。しかし終末期に近づいても強心剤の投与、透析、両室ペーシング等の侵襲的治療に反応して劇的に回復する場合もあることから、死の直前まで予後予測がつきにくい。また、多くの医師は病状が回復することもあることから、終末期であるとの説明を患者や家族に行わないという報告[2)]もある。このため、長期にわたって治療を受けている患者の多くは、医療者と終末期ケアについて討議する機会が少なく、最期に自分らしく過ごすための希望、延命治療に対する考え、最期に迎えたい場所、大切にしている価値信念などについて話し合えないまま、急性増悪により突然人生の終焉を迎え、意向に沿わない場所や耐え難い苦痛のなかで亡くなることもある。

日本循環器学会は 2010 年「循環器疾患における末期医療に関する提言」を発表し、末期医療における看護ケアの指針として、（１）意思決定支援（２）苦痛の緩和（３）予期悲嘆（４）家族ケアを推奨した。この４つの援助について、提言内では「時期を逃さず」適切な時期に行うことが重要であると記されているが、終末期に移行する時期は明確ではなく、看護の現場では、実際には「いつがその時期なのか」迷いのなかで看護が行われているのが現状である。心不全終末期患者の看護の充実のためには、いつどのような時期に患者の変化をキャッチして終末期ケアを開始するのか、どのようなエンドオブライフケアを行うのか、特に回復の希望を含む支援と死への準備支援のバランスをどのように行い、意思決定支援や苦痛の緩和などの実践を行うのか、また家族のケアを病状の進行の段階に応じてどのように行うのかなどが明らかにされる必要性がある。

## ２．研究の目的

本研究は、心不全終末期患者が最期まで自分らしい人生の選択をして逝くことを支援するため、看護師の優れたエンドオブライフケア実践から、以下の 2 点を明らかにする。

(1) 研究 1；終末期ケアへ移行するきっかけとなった、看護師がキャッチした患者の変化と変化に対する看護師の判断内容

(2) 研究 2；終末期への移行判断をしたのちに、看護師はどのようなエンドオブライフケア実践を行なっているのか

## ３．研究の方法

(1) 研究対象者

急性期病院にて心不全終末期患者の看護に従事し、終末期患者に対して苦痛緩和や意思決定支援、予期悲嘆の促進及び家族へのケア等を行った経験があり、所属長等から優れたケアを実践しているとされた看護師 6 名を対象とした。

(2) データ収集方法

研究１および 2 ともに、研究対象者へインタビュー調査を実施した。

担当した心不全終末期患者のうち印象に残った患者を回想し、患者の病状・入退院歴・生活の様子・本人や家族の病気に対する認識や言動、患者のどのような言動の変化をキャッチして終末期移行を判断したのか、その患者と家族に対して看護師が行ったケア実践の内

容、心不全特有な経過をどのようにケアに反映させたかについて約 60 分の半構成的面接を行った。

(3) データ分析方法

得られた録音データは逐語録に起こし、それぞれの研究目的ごとに分析テーマを挙げ、質的帰納的に分析を行った。

(4) 倫理的配慮

千葉県立保健医療大学研究倫理委員会および調査施設の倫理委員会等の承認を得て、研究を行った。

## 4．研究成果

(1) 対象者の概要

急性期病院にて心不全終末期患者の看護に従事し、終末期患者に対して苦痛緩和や意思決定支援、予期悲嘆の促進及び家族へのケア等を行った経験があり、所属長等から優れたケアを実践していると推薦された看護師 6 名であった。施設数は 2 施設であった。対象看護師の平均臨床年数は 13.5 年で、循環器に関連する病棟または ICU などのユニットでの経験年数は平均 9.5 年であった。女性 3 名、男性 3 名であった。6 名のうち 2 名が認定看護師等の有資格者であった。インタビューは個々に行い、平均インタビュー時間は平均 68.1 分であった。

(2) 研究 1 の結果

終末期ケアへ移行するきっかけとなった、看護師がキャッチした患者の変化と変化に対する看護師の判断内容について、分析には全 85 コードを用いた。5 段階に渡りラベル編成を繰り返し、最終的に 6 つのテーマを導いた。

① 【欲求や生への活力について、これまでの患者とは異なる心身の微妙な変化を見て、直感的に今回は退院できないと思う】

② 【普段より治療反応性も低下してすっきりせず、心臓悪液質と水分貯留がすすみ、明らかに ADL 低下を実感した時に患者の予備力のなさを悟る】

③ 【デバイスや薬物治療が最大限に行われている上で苦痛があり、患者がすでに寝たきりや高齢で、治療を乗り越えられた先の生活が見えない時これ以上の苦痛を与えたくない】

④ 【集中治療でもう一回劇的に回復するような期待や使命感もあり、あえて終末期とは考えないようにする一方で「対象かもしれない」と心が揺れる】

⑤ 【どこからが「終末期」でなく早い段階から緩和ケアを患者と考えたい】

⑥ 【色々言っても最後は医師の治療方針に依存せざるを得ない】

研究 1 の結果から、看護師は患者が発する食への執着や、多少わがままと思えるような言動であっても、喜怒哀楽などを発する活力を重要視している。また、看護師は、薬剤や身体データに対する知識・アセスメントとしてカテコラミンに対するバイタルの立ち上がりの悪さ、水分貯留の速さを重視しており、これに加えて、看護師が経験で培った回復の軌跡の感覚を統合した結果、その軌跡がいつもと違って遅延するときを終末期へ移行する時期と判断している。さらに、患者にとってのエンドオブライフを頭に置き、病態改善のための治療よりも、苦痛緩和のための治療の必要性を感じ、緩和ケアにシフトすべき時を感じてケア内容の見直しへ移行していることが明らかになった。終末期となる時期予測は、看護師が捉える患者の言動の微細な変化、知識と経験が統合してこそ感じることができる回復の軌跡の遅延、苦痛緩和と QOL のバランスの観点から推測できる可能性があると考えられた。

(3) 研究２の結果

終末期ケアへの移行を判断した後に看護師が心不全患者に対して行ったエンドオブライフ看護実践内容について、分析には 210 コードを用いた。6 段階に渡るラベル編成を繰り返し、最終的に 10 個の大カテゴリから 6 つのテーマに集約された。以下に 6 つのテーマと代表的カテゴリを示す。

① 取りきれない苦痛へ緩和方法の模索

【心まで痩せてしまった状況や身の置き所のない苦痛、あせりに対してタイミングを選んで訪室し、よく話し緩和を図る】

② 低心機能のなかでも患者の希望を取り入れた過ごし方実現のための試行錯誤

【どう生きたい人なのか全人的に理解し、身体機能が落ちたとしても、その生き様にあわせた過ごし方ができるように方法を吟味する】【心機能・ADL が低下した状態で帰宅を叶えるためのカテコラミン管理や自宅環境調整、家族への療養指導】

③ 患者・代理意思決定者が治療方針に関して話せる場作り

【患者に意思決定能力がある間に「いざというときにどのような治療をしたいのか・したくないのか」など本人とよく話し合う】【家族や代理意思決定者が治療決定に関して話せる場を作り、見守る】

④ 予後に関する患者・家族の認識把握と ACP の障壁

【患者や家族の予後に関する認識を把握しつつ、幾度も ACP を試みながらも予後説明がされていないことで躊躇する】

⑤ 医師からの予後説明がない中での家族にむけた最期の準備への働きかけ

【医師が説明している範囲内で下降期にいる現状を家族へ伝え、思い残しがないよう支援する】

⑥ 同じ方向を向き考えるために終末期にある病期説明を医師に働きかける

【予後の説明をしない循環器医師が多いので、終末期ケアが必要ではないかとよぎった場合、関係者が同じ方向を向くためにも、早めの病状説明を医師に依頼する】

看護師らは末期医療の提言内で推奨されている 4 つの看護ケア（１）意思決定支援（２）苦痛の緩和（３）予期悲嘆（４）家族ケアのほかにも、最も患者のそばにいて、患者の価値観や望む生き方などの情報を捉えることができる特性を生かし、患者に安寧な日常を感じてもらえるように、薬剤や身体データへのアセスメントを行い残存心機能と患者が望む過ごし方の実現可能性を見極めながらケアを行っていた。

また、医師からの予後説明がなされにくい現状のなかでは、予期悲嘆のケアをしにくい現実も明らかとなったが、それでも患者・家族が悔いなく望む過ごし方ができるよう医師から説明されている範囲で最期までどのように過ごしたいかを話すことを促し、その一環として医師への病状説明を働きかける等、試行錯誤していた。

以上より、本研究の結果によって、心不全終末期ケアの現状における問題点が浮き彫りになったと同時に、医療者と患者が終末期ケアについて討議を開始する時期の目安を見出す一助が得られた。また、患者が最期まで自分らしく過ごすための希望、最期に迎えたい場所、大切にしている価値信念などについて話しあいを持つこと、残存心機能と患者が望む過ごし方を実現するための看護指針を見出す上での一助が得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>坂本明子 |
| ２．発表標題<br>心不全終末期患者へのエンドオブライフケアの明確化（第1報）：ケア移行に関する看護師の判断内容 |
| ３．学会等名<br>日本循環器看護学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>坂本明子 |
| ２．発表標題<br>心不全終末期患者へのエンドオブライフケアの明確化（第2報）：看護師が終末期ケアへの移行判断後に行った看護実践 |
| ３．学会等名<br>日本循環器看護学会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| 日本循環器看護学会第16回学術大会　最優秀演題賞受賞：<br>心不全終末期患者へのエンドオブライフケアの明確化（第1報）：ケア移行に関する看護師の判断内容 |

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|